

龍南論 : 龍南

著者	南, ?之助
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 7
ページ	7 5 - 8 1
発行年	1918-06-20
その他の言語のタイトル	竜南論 : 竜南
URL	http://hdl.handle.net/2298/6812

龍 南

龍 南 論

南 清之助

(一) 逍遙の想

獨斷の上に立ち雄々しく生命の眞体を展開して進ま
んは本領よ。盲目なる我。大なる硝子の障壁に衝突
して胸を碎き墜落して悶ゆる鳥の如く大なる煩悶裏
に死せんも測るべからず。この愚かなる情によりて
盲目となり人に笑はるゝは知る所にあらず。唯空し
き裡に得ん獨斷の光を熱烈に求め之に我が生を終へ
んとす。獨斷と空想との飛交ふ儘に踊りゆく所こゝ
に一個の自由の天地あり。人は空想と理想とを差別
あるものとすれどそは一面より見れば然らず。空想
に光明を得れば理想となる。理想も客觀的には空想
なること多し、空想に權威を附して發表すれば世の
嘲笑を得るのみ。ユベルニカスの地動説、コロンブ
スの陸地發見皆こゝにあり。この發表は自己の思索

に對して責任を重んずる所以なり。無責任なる思索
をなさざるは自己の個性を重んずる所以。自己の個
性に權威を附する所以なり。この力なき個性は自己
個性の存在を否定するものなり。理想なき者はかく
の如し。信念なきものはかくの如し。

個性は力なり。力は二元の融合によりて發せしめ得
るものなり。凡そ兩性の結合によりて力を發現す。
時間と空間とありて靈力存す。思ふに力とは時間空
間の融合する所にあり。この力は生命なり。生命の
欲求は理想なり。生命は理想によりて流動す。故に
靈力は理想の光によりて流れゆく。この流に立ち詩
的に生を觀じゆくは誰ぞ。力の流は二元の山峯の峽
谷を流る。この極端と極端との間を流るゝ中庸の域
に力ありて靈力の流を觀するを得。すべて生の妙味
はこの中庸にあり。深刻なる峽流の中靈力の流を觀
する所、生の妙境あり。人生は山谷の溪流を觀する
其想を移して觀するを得。則ち溪流の中、水なる分
子は靈力なる各個性にしてこの水煙は虹霓を現じて
靈力の存在、眞の生命の流を蔽ひゆくものなり。而
も水煙の中、響きくる歌の聲あり。これ溪流の邊に

觀じゆく哲學宗教藝術道德なり。この美しき調により大生命を慰めゆくなり。大なる生命はこの旋律によりて永生を得つゝゆく。この旋律を作るは生の力にして生の目的なり。故に人類の生は大生命なる神を慰めつゝ其の永劫性を保持しゆくか。こ々に一切のものゝ合一點あり。生の旋律によりて一切は交渉す。故に一切は詩なり。人は生そのものに詩を歌ひつゝゆく。之を高調するは詩人の天職なり。かく詩化して觀する所に人生の大なる妙味あり。生の詩化は我が生の理想化にして之をば溪流哲學の妙味となさん。大正七年四月廿六日、日も夕、暮れゆく麥隴の間を黙々と金峯の方に歩めり。坪井の流、心なく傳襲に囚はれ走りゆく。人類の社會の如。音もなく。

龍田山背後に新緑に神秘の喜びを湛へ低う蹠り亦沈黙の中に暴れんとす。

肋膜を病みて母の膝下に臥しては早も一年の昔となりゆく。思へば夢なり。今こゝに立ち故山を眺むれば、大阿蘇南や北に走りて青紫に深く堅く鎖せる戸の如く白雲乱れて山峯を蔽ふ。天空徒に漠たり。我

れ悲痛もて此の境を充たさば我が生亦悲痛に徹底するを得べし。我れ悲しむと我れ喜ぶとそれ我が生の價值何れぞや。悲は眞面目と境し喜は浮きて亂るゝ泡沫の如し。我れ喜を捨てゝ悲をとり生の悅樂を捨てゝ死の痛苦に入らんかな。

金峯の姿邊焉として雲霧立ち迷ひ紫光乱れて日は今落ちゆく山の彼方。人の生亦如是。日は山に没するものと思ひ定めにければ今、日没の悲あれど我れ驚かず。心正しければ心平かなり。生涯を通じて正しければ死に遭ふとも驚かず。これ天の命を信するの極みなり。日は落ちゆく有明の海。光は廣き麥隴の上に殘榮を流し菜花黃に一時に亂れて夕風騒げば清香鼻を突いて我れ醉ふ春の暮。あゝ龍南の春逝かんとす。龍南の天地に生を寄する今や二星霜。果して如何の想を味ひ如何の境に造るを得しや。

(二) 理想得ざるべからず。

龍南に來りて安らかに生を味ふ。大正六年二月二十六日理想の光を囁きしはそも我れ狂せし端緒なりしや。曰く。高き山に登りて我を思ふ。荒波吼ゆる磯邊に立ちて我を思ふ。思ひて到らず。解けざる謎。

宇宙や人生や。唯皮想の觀に捉はるればなり。大自然の影を見て大自然の心に入れ。暗き荒野辿りゆく人多けれども光ある一道を荒野の中に見出して歩みゆく人は稀なり。照りくる光なくんば荒野の中沼澤に陥りて生を失はむとす。實に我等心の光なくんばこの荒野原を越えて彼方緑の森に到る能はず。この光とは何ぞや宇宙生命幾万年の叫び。人類生命の叫び。我等生命の叫び、本心の叫びなり。彼方緑の森とは宇宙生命の目的、永生なり。宇宙生命の光の人類の心に映りくる影は今も古も不變なり。人は荒野原に逍遙して影のみを捉へて悶々、光を得る能はず曰くバンを得んために學問すと。然り彼等の望む所は肉慾を充たすにあり。歸する所は淫蕩の巷なり。人曰く、人類の目的は其種族保存にありと。蓋し人類夫れ自身の目的を達せんとするや單にバンのみにては能はず。必ずや其民族を蔽へる理想即ち宗教的精神の潑洩たるにあらずんば能はず。かの法王の十字軍を見よ。かのローマを見よ。

人は希望によりて活くと。實に希望により心に浮び出でし理想なくんば人は停止して進まず。理想の如

何に民族をあらしむるか。かのドイツ民族を見よ。理想に生きんとする努力なくしてかくの如きを得んや。偉人は理想を贏ちて永生せり。これ宇宙生命の人に興へし光即ち暗示を捉へしなり。まことにこの光この暗示をば捉へよ。今うべくんば今得よ。朝に道を聴かば夕に死すとも可なり。我れ思ふ理想とは人類の思想の池水に浮び波に亂れて漾ふ大自然の光なり。この理想の光は宗教なり。人は理想に活きてはじめて宗教あるなり。自己の捕へし眞の理想に活くる能はず宗教の形骸を徒に身に纏はんとせどもこは無意味なり。博愛平等、偽善を責めし實際の裏面は今や歐洲の天地に展開せられ終りぬ。

暗き荒野行く人光明を捕へ道を辿らば、こは自ら理想をて自ら宗教に生くるなり。心の光を得ざる人は理想の光を認めて進みゆく人の後に附して荒野を行け。まこと宗教とは人に理想を與ふるもの又理想とは人に宗教を與ふるものよ。人は宗教心なくんばて強固なる精靈を得る能はず。理想ある人は宗教的人なればなり。理想を得んとせば大生命の人に與ふる暗示を得よ。この暗示を捉へんとせば先づ自

己に立入れ。己が心に入れ即ち悟れとなり。自己を知りて自然に親しみ自然に入れ。こは沈思冥想せよとの自然の要求なり。自己を知りてこそ自己を救ふを得。自己を救ひて他を救ふを得。自己を知らずんばその腐敗を知らず。その腐敗もて他を腐敗せしむるも知らず。相同じて腐敗しゆく世の半面の悲しきことよ。實に心に自覺なきものゝ落ちゆく道なり。實に己を知るは理想を得る前提なり。我れ冥想によりて心を圓滿にし心は理想の境涯を味ひ大自然の光を得て我が心を照らさんかな。まこと理想なければ心の行手を照らす光明なく心を安固ならしむる能はず。活きよ理想の上に。かの日蓮の如く。かの日蓮の如く大なる理想に活き理想の爲めに生命を擲ち永生を贏ちうる覺悟なくんば日本の將來を救ふ能はず理想の光即ち宗教的生命則ち大自然生命の光に活きんとするに非ずんば人生は無意味なり。意味なき人生何かせむ。諸君よ。我等人生の中最大なる過渡期に立ちて之を觀じこゝに思はずんば大なる將來を失ふものなり。まこと理想の光なき青年はかの暗き荒野原の沼澤に陥りて墮落の淵に沈まむ。あゝ悲し

いかな。諸君よ。かくいふ要は自然に親しみ大自然の靈に同化して自己の心を圓滿化し自己の精靈の安固不動を得ば理想の光は心を照らしこん。かくてこの光により我等が心を照らし以て光榮ある大なる將來に向ひ理想のためにこの生命を捧げ我れ人共に日本

本の將來を救はんかな。

と若き血潮は松籟と調合せて高鳴りしは空しき夢なりき。高き理想は深き現實の悲哀を伴ふ。今この野邊に我れ逍遙して大なる寂寞と深き契を結ぶなりけり。我れ生を世に享けて共に心を語る友なく徒に孤獨の悲哀を味ふ。神を思ひて心を慰むれば我れや善し。然れど、かの悲哀は我を追求してやまず。

我れ悶ゆ。あゝ人は弱し。意志の力なき我れこゝに悶ゆ。筆を執りて正氣を呼べば光明正大堅忍不拔遠大雄絶勇斷果敢是男兒之精隨と。心を別天地に馳せて學習を怠り心を養ふを旨として悶ゆるは何ぞや。誠に龍南の天地浮薄なる心なく激湍怒號するの雄心に充ちよ。我れは悲しむ。我が境の滔々たる流に相離れ相遠ざかりゆくを。我れ人呼ぶも行かず。人罵れど侮れど我が道我れ行く。我れ叫ぶ我が神に代り

て。人は滅びゆくなり現實に囚はれつゝ。あゝ龍南よ。今茲に覺醒して龍南の使命を悟らざるべからず我れ思ふ。金峯阿蘇の清高雄大なる山容と龍南の氣魄たる剛毅朴訥とは龍南健兒救世の使命と大なる關係ありと。蓋し音なき音を聽きて其の音の微妙を覺り光なき光を視て其の光の幽玄を知るは龍南天地に使命を悟りし者の特權なり。

(三) 清高雄大と剛毅朴訥

我れ思ふ龍南の天地とは大なる詩的生命の躍れる境なりと。又曰く、大自然の高大なる光を山水の間に裏みて投せし地なりと。されば詩的生命に生きんとする者大自然の風土に接せんとする者は當にこの天地に正氣を養ふべし。

我れ大阿蘇の溪谷に徜徉して神來の音譜に觸れ清高なる氣韻に酔ふ。我れ大阿蘇の山徑に四顧して神光の大景に接し雄大なる風容に覺む。故に清高雄大は自然が蘇山によりて龍南に下せし天光なり。我れ日夜之を思ひてやまず。龍南健兒宜しく清高雄大なる心境に到るべきなりと。

然らば清高雄大は果して剛毅朴訥と如何の關係あり

や。

古へ希臘の文運隆昌を極めし時に當り幾多の偉人現はれたり。然り而して其の間よく清高雄大の氣韻を一世に湛へしものソクラテスを措きてあるべからず彼れ正を維し義を立てデルホイの神託によりて使命を貫く。死に臨みて哲理を談じ正義の毒杯を仰いで永生の境に入れり。眞に清高に絶し雄大に絶し死生を意とせざるソクラテスは其價值よく三聖の上にある。我れソクラテスの傳を讀みて忽ち之を崇拜し其の剛毅朴訥なる行狀に欣然たり。彼れの清高雄大なる氣韻は其の源を彼の剛毅朴訥なる性行に發せり。然り剛毅朴訥は清高雄大そのものなり故に一個性に於てよく二者を體現しうるなり。思ふに自然崇拜多神教なる希臘人の間にありて徹底的に大自然の正氣をとりて之を體現せし者はソクラテスなり。乃ちソクラテスは自然生命そのもの、然り神そのものなりされば今こゝに龍南にありてよく自然の靈氣を体得せば剛毅朴訥期せずして到り今千載の後に於てソクラテスの知己たるを得べきなり。ソクラテスの風韻プラトンの精氣に觸れてアイデア論を吐かしむるに

到る。蓋し自然によく接觸しうる個性はよく理想を語りうべければなり。故に清高雄大剛毅朴訥なる者はよく理想を宣傳するを得。而して理想は神そのものなり。故に剛毅朴訥は神なるものなり。以て清高雄大の理想を表象せるを歡ぶ。乃ちこゝに清高雄大と剛毅朴訥との共に神的意義あることを明かならしむるものなり。

(四) 氣風復活と剛毅朴訥

近時純平たる利他主義犧牲的精神に活動する者稀にして偶々かゝる者あれば世人之を嘲笑し亦利己主義に歸して顧みず。甚だしきは親子の關係なる愛情をすらも利己の行動として顧みざるに到れり。然れば儉薄なる世人は益々儉薄にして利これ走る。この例を曩きに來熊せし某僧侶に見るを得たり。かゝる腐敗せる宗教家あるにより浮薄なる世態は益々深みゆくなり。思はざるも亦甚しといふべし。これ直覺的に自己の行動も亦空虚冷酷なることを自ら表彰するものなり。今やかゝる宗教家教育家滔々たり。世人之を聞いて雷同し其利己的本能の焰を熾烈ならしめたり。今や龍南の天地もこの雰圍氣に浸潤せんとす

るの危機にあり。されば剛毅朴訥も其價值低下して熱なき冷かなる空骸に墮し來れり。剛毅朴訥は神なり正義なり萬古不朽の大道なり。單に正行勇往邁進不言實行を以て論すべからず。其價值遠く仁の上にあり。世相を貫いて渝らざるものなり。情熱を失ひゆく龍南の氣風は浮薄なる利己主義に浸されんとす。剛毅朴訥を裝ふも淫靡の風盛んならんには亦何をかなさん。思へ。人物の養成に着目せざる教育方針は亡國的教育方針のみなりと。この意、人を導かんとせば自ら理想的人物たらんと努力すべしとなり。自ら不徳をなして表面を糊塗する才子はすべてを誤るものなり。今や世はかゝる才子を要せざるなり。徒に自己の才能もて單に生存の目的に到達するが如き才子を要求せざるなり。時代の今眞に要求する人物は實に剛毅朴訥清高雄大なるものなり。之を切言すれば衰頹せる時流に抗して之を一肘もて支へんとする意氣あるソクラテスの如からざるべからず。敢て言はんソクラテスは現代科學を基礎として立てる文明の潮流を善導すべき最適人格者なりと。思ふにクリストの天國に到り、清純に活きんとする

校風振興の一策

二、三、乙 楠 本 正 繼

は彼れの情的思想より出でたり。之を表象するものはかの洗禮にあり。是を假に情的宗教といはん。思ふに釋迦は佛なる理想体に合一して其安心立命を得んとする意的思想にかれの一切の行動は源しぬ。之を表象するものは不動の形相にあり。是を假に意的宗教といはん。

この二者に對立して立てるは實にソクラテスの智的宗教なり。之に源するは一切の哲學の流にしてソクラテスを哲學の父祖とする所以なり。之を表象するものは自然にあり宇宙にあり。自然の風容より清高雄大をとり來りて其表象とす。故に剛毅朴訥は智的宗教の徵表的精神なり、科學の徵表的精神として最高の價值あるものなり。

剛毅朴訥はソクラテスの生命なり。死生を超越して智的に活きうるものなり。克己の大精神を包容してソクラテスの如く宗教的精神愛國的精神に活きうるものなり。

然れば今浮薄なる世相を多く見るの時この剛毅朴訥を龍南に復活せしめ絶叫するは實に我等、社會改良運動の第一歩なり。起て八百の健兒。起てよ八百の健兒。(五月五日金峰山巔に朝暈を仰ぎし後語す)

今や天下の識者は時局の重大なるを説き、國民の緊張せざるを憂ふるものゝ如し。若し、國難の來る事今少し明白の理由あらんには、緊張せざらんと欲して得ざる筈なるも、目下の所しかく神經過敏と成るの果して望ましきや否や疑問に屬すと謂ふべし。然れ共、疑問に屬すといふは、唯危機の容易に切迫せずと豫想せしまでにして、天下の形勢を雲煙視し去るを意味せるに非ず。従つて、我國民が動もすれば陥らんとしつゝある或種の狀態を脱却して、質實剛健なる精神を養ひ、以て四海に抗立する所以を思ふは固より吾人の希望して措かざる所。

或人は國民思想頹敗して稍もすれば忠孝の滑稽視せらるゝをは教育家及青年が政治より遠ざかりしに起因すとなし、頗る痛辣の評を下して曰く、「青年は意氣最も壯にして政治熱に浮かされ政治より遠るの困難なる可きに、自ら之より遠かり、生活難就職難を訴へずんば耽溺に浮身を窺し、或は俳優の末輩